

# Weekly Michael's News

## <今週の聖句>

2016年7月25日発行 No.10

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」

(旧約聖書 創世記 第1章 27・31節)

## <自分の器を広げる旅の安全と導きを願って…。海外研修&交換留学 壮行式を挙行!!>

そろそろ前期もゴールが近づいてきました。夏休みの予定として色々な計画を立てている人も多いと思いますが、先週の水曜日、今年の夏に海外研修を志望する学生38名がチャペルに集まり、その旅の安全と導きを願う「壮行式」が礼拝形式で行われました。センター長の近藤先生が、神の求める生き方を示す「喜び・祈り・感謝」の聖句を朗読された後、下村学長からは海外研修に向かう際、求められる姿勢について、特にこのプログラムがただの旅行ではなく、責任と自立（自律）の伴うものであること、また、だからこそ座学や机上では得られない有意義な学びを手にする大きなチャンスであることが語られました。これからの挑戦を自覚しながらしっかりと話を聞き、魚住先生の問いかけに対して大きな声で決意表明をする学生の姿が印象的でした。世界中で血が流れる残念な事件が頻発していますが、そんな時代だからこそ、互いの違いを認め合いながらコミュニケーションを図る「人間力」が求められると思います。今回旅立たれる皆さんの歩みが守られ、貴重な学びの機会が祝されるよう、心から祈ります。



聖句を朗読される近藤先生



海外経験の意義と責任を問う下村学長



鋭い眼差しが可能性に繋がる…

## <ブライダル産業論で模擬結婚式!! チャペルに響く結婚行進曲に未来の可能性を見た!?!>

先週の木曜午後、チャペルには結婚式で有名な結婚行進曲（チャチャチャソフってやつね）が鳴り響きました!! こんな週日に結婚式!? と思われるかも知れませんが、ご安心ください。経済学部ホテル・ブライダル・セレモニーコースの実習で模擬結婚式を執り行ったのです。参加した学生は将来ブライダル関係を志望する人が多いのか、模擬と言ってもその様子は真剣そのものでした。キリスト教センターでは、実際にKIUチャペルで結婚式が行えるよう必要な準備をしています。将来、ここで永遠の愛を誓う2人が現れる…かな?



お二人の幸せを祈ります!?

## ＜先週のメッセージ＞

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

7月18日（月） 前田 次郎（理事長） テーマ：「心に知恵を、賢いものになれ」

今日の聖句は、ソロモン王が残した知恵の書といわれる箴言の言葉だ。彼の事を記す列王記には「知恵と洞察力、そして海のような広い心を持つソロモン」とある。王として取り組む様々な課題、それに対処するためソロモンは知恵を重視した。今の時代は、多くの知識や様々な能力を求めようとするが、本当に大切なのはその場に求められる力を適切に判断して使えるか否かであり、それを我々は真の賢さ、「知恵」と呼んでいる。有名でなくても、華々しくなくても、与えられた場所で自分の力を他者のために真剣に生かす。そのような「知恵」を大切にしたい。

7月19日（火） 米浪 信男（経済学部） テーマ：「私の外国語習得法」

私は、中学で英語を学び、大学でドイツ語を学んだ後、独学でスペイン語やフランス語も学んだ。その取り組みの中で、重要となる4つのポイントを紹介したい。1つ目は、『学習意欲』だ。何のために学ぶのか？を自分の中でクリアにしておく事が大切だ。2つ目は『学習姿勢』。必要な物を揃えるだけでなく、短い時間でも毎日取り組む、まさに「継続は力なり」だ。3つ目に『学習目標』。どのレベルまで求めるのかを明確にし、その為の機会（チャンス）を大切にすることだ。最後は、学ぶ事自体を『楽しむ』事。3つの「き」（暗記・根気・粘気）で生涯学び続けたい。

7月20日（水） 山本 克典（副学長 経済学部）

テーマ：「馬を水辺に連れて行くことはできても、水を飲ませることはできない」

今日のタイトルは、イギリスに伝わる有名なことわざだが、現在教育学を研究している自分にとって深い示唆を与えてくれる。日本でも、明治から大正にかけて、哲学者デューイが提唱した子供の興味・関心を引き出す教育の重要性が注目された。現在はどうか？ 残念ながら、今の日本の教育は、授業回数や出席など教育の形式の方に重きが置かれてしまっている。形式を重んじる中でゆとり教育に対する批判が起こっているが、自分のやりたい事、学びたい事を学生自らが進んで目指す、真の学ぶ楽しさを求められるような教育を展開していきたいと願う。

7月21日（木） 松本 かおり（経済学部） テーマ：「命の重さの感覚」

今日のタイトルは、社会学の研究をしている自分にとって強い関心と重い響きを持つものだ。私は1998年にロシアのサンクトペテルブルグ（旧ソ連のレニングラード）へ留学したが、そこで「ターニャの日記」に出会った。「～が死んだ。」という短い言葉が綴られている、たった9枚の日記に、日本の7倍もの戦死者を出した大戦の狂気を強く感じた。戦争は、人の命を取るに足りないちっぽけなものにしてしまう恐ろしい力を持つ。日本は、海外で亡くなった人の名前を報道するなど人の命を悼む文化がある。大きな岐路に立っている今、この文化を大切にしたい。

7月22日（金） 山本 ひとみ（経済学部） テーマ：「信じて学ぶ」

私には二人の父がいる。一人は実の父、もう一人は大学時代の恩師で36年の付き合いになる。恩師は私にいつも進むべき道を示してくれたが、それはとても困難な道ばかりで、逃げようとしても決して逃してくれなかった。恩師の示す道は本当に困難であったが、信じて最後までそれを頑張ると必ず道が開けた。皆さんもこの大学で本当に信頼できる人を見つけてほしい。どのようにして見つけるか。それは本能のような直感が大切。そして、この人だと思ったら、どこまでも信じる。はじめのうちは何をしているか分からなくても、次第に分かってくるようになる。私も皆さんの母になれるように頑張りたい。

（文責：野間光顕）

